

優秀賞

「将来の夢・私の原動力」

宮城県仙台市立八木山中学校

3年 棟方 有紀

私の将来の夢は研究者になること。新しい発見で女性でも世界と時代の最先端に立てることに強く憧れるからだ。その上、やはり一番の理由は父の影響だと思う。

私の父はサケ科魚類の研究者である。私が小学5年生の時、父の研究に関する講演会に参加した。講演会場では普段のぐうたらな父とは別人の、生物の保全活動について熱く訴える研究者としての父の姿があった。私は父が立派な研究者だと知る機会を得て、意外にも感動し、何だか父が誇らしくなった。その時の私は、一生徒として父が話す内容に引き込まれ、120分間の講演に聞き入ってしまった。私の中で漠然とした将来の展望が「研究者になるかも」から「研究者になる」に変わった瞬間だった。

父からは、研究者の役割とは、単に環境を守るだけではなく、地球に住む人間の未来を見据えて水産の分野から人のために魚の生態や行動の解明に取り組むこと、保全の分野では人の食の可能性について考えるため、さまざまな分野にまたがる研究が必要なのだと改めて教わった。

しかし、今の私ではまだまだ力不足だと感じている。何故なら、学校の成績が横ばいだからだ。陸上の砲丸投げでは全国を目指して日々、練習に励んでいるし、家庭学習もワークや授業の予習を毎日やり続けている。それにもかかわらず、テストの順位は20位前後。なかなか10位以内に食い込むことができないのだ。最近では志望校のレベルと自分の実力の差が開いていくような気がして、焦っている。どうしたものか。

ある日、父が2日間の出張から帰宅し、久しぶりにゆっくり話す機会があった。私は父に成功の秘訣を聞くことにした。「お父さんは何をして成功したの？」

「それはね、失敗を受け止め、記憶から消さなかったことだよ。」意味がわからない。「失敗したのに成功した？ 失敗って実験のこと？」「そう、8年間もね。」

信じられなかった。8年間、何度も失敗し続け、成功にたどり着くのに父はどんな実験を繰り返してきたのだろうか？ どうやらそれは、魚のストレスに関する実験だったらしい。サケ・マスが海に降りていく理由が魚のストレスに関係していると、当時の父は考えていた。しかし結果は、ストレスの数値に変化はなく、実験はことごとく失敗に終わったそうだ。当時の父は、博士課程を修了し、ポストドクターとして大学から栃木の水産試験場に出向し、毎年のよ

うに同じ実験を繰り返していたそうである。当然ながら生物である魚類の行動には季節性があり、実験は年に1回限りなのだと以前、父が教えてくれた。しかし、何年実験を繰り返しても、当時の父の仮説とは反対の実験結果が出てしまったらしい。魚のストレス数値は上がることはなく、海に見立てた湖に魚たちが降りることもない。父は悩んだようだ。

毎年、学会の舞台では同僚たちが実験の成功を発表していく中、父は自分の実験の失敗を8年間も報告したのだ。当時、父はどれほど悔しかっただろう。私は父の話を聞いているうちに思わず目の奥が熱くなった。「でもお父さんの先生はすべてお見通しだったんだよ。」

学会の終了後、父は父の先生に結果を報告した。すると先生は、「そう、ではその結果が真実なんじゃないの。」先生の答えは素っ気なかった。父は思わずハッとしたようだ。失敗には必ず意味がある。視点を変えて考えるということをおぼえていたと、父は笑った。「答えは既に出ていたんだ。簡単なことだったよ。」それから、父は自分の研究をグイグイと進めて、ついに真実にたどり着いたのである。過去の実験は全て成功だった。父の失敗の実験は、実は世界初の学説の発見であり、それまでの学会の常識を覆したのである。「つまり、魚のストレス数値が上がらなかったのは、それが事実だから、お父さんの場合、ある一つの見落としが原因だったんだ。でも、そこに気づくまでに8年は長すぎたかな？」

父が、自分の失敗からは目を背けなかったこと、視点を変えて実験を見直した結果、真実にたどり着けたのだと私は考える。私は父の話を聞いて、自分の中の焦りと不安がスッと消えたのを感じた。

私のエネルギー源は、何度も挑戦しようとする熱意だ。真実をねじ曲げず、固定されがちな物事の考え方を柔軟に捉える。失敗は自分の視点や立ち位置を変えて考え直してみる。それには失敗を恐れず、その時の結果を受け止める勇気が必要なんだと、私は思った。

この作文は、私が研究者になる挑戦への決意であり、第一歩である。そして、確実に私の将来のエネルギー源となると私は信じる。